『罪悪感』

作者　淺羽　一

ものは考えようだと思った。罪悪感を押し殺してまでもこの関係を失いたくないのならば、むしろ彼女が本当に愛しているのはあの男でなく自分の方じゃないか。ただ単に面白おかしいだけの付き合いなんて話題の遊園地のアトラクションと変わらない。

雅彦(まさひこ)はいかにも気取った仕草でグラスの中の氷を鳴らしながら、自嘲の笑みを浮かべた。我ながら惨めな慰めだ。要するに自慰行為(オナニー)だ。しかもさらに質の悪いことに、この自慰行為はまるでスカッとしない所か余計に気分が重くなる。でも、それでも、じっとしたままで不安に押しつぶされてしまうよりは良かった。

クリスマスを間近に控え、いよいよ華やかさを増した大型ショッピングモール、そのフードコートの一角でいかにも親密な恋人同士のようにテーブルを囲んでいた美夏(みか)と、それからあの一見爽やかながらもきっと根性悪の優男は、ふざけた話だが確かに場の雰囲気に馴染んでいた。思いがけない休日だからと言ってそんな所で髭さえも剃らず、ほとんど寝間着みたいな格好で一人歩く三十男の方が不純物なのだ。

雅彦は心底悔しかったが、同時にそう自覚していた。そしてだからこそ彼は今にも全身の内蔵が裏返りそうな激情を飲み込んだ。

もしもあの時、彼があの場に飛び出していって大騒ぎをしても、きっと端から見れば哀れな失恋男が幸せなカップルのデートを邪魔している風にしか映らなかった。そんなのはあまりにも惨めにすぎた。

実を言うと雅彦はそれ程酒に強くない。むしろ弱い。その証拠に先ほどからグラスの中の琥珀色はいっこうに減らない。舐めるように何度か口を付けたものの、溶けた氷の分だけ増えてあたかも最初から何も変わっていないようだ。残っている氷の体積に反比例して、先ほどから中年のバーテンダーが横目で彼を見る回数が増えていたけれど、バーならではの気遣いで客の心情を察してか声をかけてこない。或いは単に面倒な客を敬遠していただけなのかも知れない。

ふっと、先っぽが赤くなった雅彦の鼻に、もてあましたウィスキーとはまた異なる、花嫁のブーケのような香りが届いてきた。決して成金趣味じみた押しつけがましいものじゃない、華やかながらも繊細で、それでいて甘い。彼の目が我知らずその元を追ったのも自然な反応だった。

席を一つ挟んでカウンター席の隣に座った女は美人だった。どれくらい美人かと言うと、適当に思い浮かんだ流行りの女優を何人か足してその人数で割ったような顔の美人だった。

どうしてそんな気になったのだろう。酒のせいか傷ついた気分の穴埋めか。もしかするとそのやりとりによって証明したかったのかも知れない。自分は決して無様なだけの男じゃないと。

雅彦は一度だけグラスに口を近づけ、酒を飲むと言うよりも随分と小さくなった氷を舌先で舐めるようにしてから、やがて勇気を出して誘ってみた。一緒に飲みませんか。

途端、彼を見た美女の目はさながら不埒なエキストラに辟易する女優のそれだった。でも、そこで大人しく引き下がればいよいよじり貧だ。だから彼は内心の動揺を必死に隠して一世一代の演技をした。それはそれは見事な大根芝居だったが、しかしそれが功を奏したのか美女は薄く笑って席一つ分だけ体を横に滑らせた。雅彦は自分で誘っておきながら急に接近してきた美女に驚いて反射的に背を仰け反らせた。それでもグラスから手を放さなかったのは、即興ながらもハードボイルドを気取る男としては及第点だろう。

後になってどれだけ考えても、雅彦はこの時に彼女と交わした会話の内容を思い出せなかった。そもそもまともに会話が成立していたのかどうかさえ怪しいが、それ以上に無我夢中だったせいだろう。

だが、それでも確かに彼はどうやら奇跡のような展開を経てその夜いきなり美女と二人でホテルに泊まったし、あまり自慢できた話ではないが美夏以外の女を生まれて初めて抱いた。残念だったのは、それが気持ち良かったのかどうかすら覚えていないことだ。しかし同時に彼はむしろそれで良かったのだと思った。何故なら数時間後に半裸の女の隣で目覚めた時、彼の心に生じた罪悪感。それはもう数日前に恋人と見知らぬ男の密会現場を見た時よりも、その二日後に彼女の携帯電話のメールを黙って見た時よりも、いっそそれまでの人生の中で抱いたいずれの感情よりも激しく苦いものだったからだ。これで幸福な記憶があれば、それがそのまま反転してさらに酷いことになっていただろう。

寝起き姿さえ画になる美女に高揚することもなく、まるで十三階段を今にも上らんとする死刑囚じみた気分でホテルを出た彼は、朝焼け空を見るやいなや女へ別れを告げた。「さようなら」でも「それじゃあ」でもなく口をついて出た言葉は「すいません」だった。美女は、やはりさすが美女と言うべきか、そんな不甲斐ない男の態度を前にしても余裕綽々の笑みを崩さずに「あなたって夜と朝じゃまるで反対なのね」と言い残して去っていった。それが雅彦の脳裏に美夏から浮気相手へのメールを思い出させた。

〈沢村（さわむら）くんってＭなんだね～〉

〈雅彦がいつもＳだからちょっと意外だったかも！〉

おぞましいと、雅彦は吐きそうになった。沢村だか沢沼だか知らないが、そんな奴との情事を純粋に思い出しているだけであればまだ良かった。彼が最も辛かったのは、そこに自分の名を挙げて比較されている事実だった。

〈こっちこそ楽しかった。本当にありがと～〉

〈そんなの雅彦には内緒に決まってるじゃん。…ま、ちょっと悪い気はするけどさ〉

昨日は楽しかったよ、ありがとう。でもさ、彼氏さんにバレたらまずくない？ なんて沢村からのメールに美夏が絵文字混じりで返すやりとり。雅彦にはもうそれ以上の会話を知ることは不可能だった。

彼は美夏の携帯電話をソファの上に戻した。彼にとって浮気の証拠を見続けることは精神的に辛すぎたし、そもそも一刻も早くそれを手放さなければ今にもその画面を叩き割ってしまいそうだった。

彼は動けなかった。本当はすぐにでも風呂場への扉を開けてシャワー中の彼女へ罵詈雑言を浴びせたかった。でも、そうしなかった。許そうとしたからじゃない。意気地がなかっただけだ。現にだからこそ彼は彼女が再び部屋に戻ってきてからも平静を装った。秘密を暴く正義感よりも捨てられたくないという恐怖感が上回った。早寝の理由は仕事のせいにした。

それから一週間、世間がクリスマス気分で浮かれるのを尻目に、彼はずっと美夏にバレたらどうしようという不安感と彼女を裏切ってしまった罪悪感を抱えていた。

しかし、それは同時に彼にとって救いでもあった。何故なら日毎に膨らむ罪悪感は、そのおかげでいつしか美夏や沢村への怒りや悲しみと釣り合うほどに重くなっていたからだ。結果的に、極端に被害者意識へ傾いていた彼の心の天秤は、それによってある程度の安定

を見せていた。
お互いに裏切りが一度ずつ、それならそれでおあいこだ。自分はそれを受け入れようじゃないか。雅彦は徐々にそんな理屈で納得しようとした。いや、むしろ彼女の罪を黙って許して全てを飲み込むなんて、それこそが愛だとさえ思い込んだ。だとすれば二人の日々を守る為に、彼女に何も知られないように過ごすことこそが、彼女への愛の証明なのだ。
雅彦は受け入れた。外で美夏と会う時も平然としていたし、彼女が部屋に泊まりに来た時も前と変わらず抱いた。その際、数日分のメールや携帯電話の発信履歴をこっそり見ることもしたけれど、あれ以来例の沢村と連絡を取り合っている気配はどうやらなく、だからもうそれ以上深く詮索しなかった。
雅彦は改めて思った。何も考えず付き合うなんて、今から思えば子供の恋愛ごっこじみていたと。お互いに重さを抱えながらも愛し合っていくことこそが大人の恋愛だ。そして彼は決意した。そんな真実の愛で結ばれた今こそ、彼女にプロポーズをすべきじゃないかと。彼は貯金をはたいて婚約指輪を購入し、数日後に控えたクリスマス直前の週末を待った。
土曜日の夜、雅彦と美夏は彼の部屋で二人きりだった。祝日も合わせて今日からの三連休、どうせなら少し豪華に過ごそうと誘った雅彦に、美夏が普通で良いじゃないと言ったからだ。彼にしてみれば折角のプロポーズ記念日だったのだけれど、まさかそれを言うわけにはいかなかった。それに、考えようによっては日常の中での静かな告白と言うのも素敵なかも知れない。
美夏が腕によりを掛けた夕食と雅彦が買ってきたケーキを堪能し、一本二万円もした赤ワインのボトルがようやく残り半分ほどになった時、おもむろに「はい、プレゼント」とリボンを飾られた包みを差し出したのは美夏だった。
ありがとう、と応えて雅彦は丁寧に包みを開けた。そこには見るからに高級そうな黒いチェスターフィールドコートがあった。
「これからもっと寒くなるみたいだし、良かったら使ってよ」
少し照れた表情の美夏の言葉に、雅彦は素直に感動した。ちょっと着てみても良いかな、と彼女の返事も待たずに立ち上がって袖を通すと、それはきっちりと採寸したかのようにぴったりだった。
ありがとう、雅彦は言った。そして同時に確信した。今夜は最高の夜になると。
「良かった」
美夏は心底から安堵したように笑った。「コートってサイズ感が難しいしさ、でも折角だし驚かせたかったし、やっぱり知り合いに頼んで正解だったな」。
おそらく、最後の部分は安心感からつい口走ってしまっただけの言葉だった。でも、雅彦はそれが気になった。そして美夏はそんな彼の変化に気付いたのか、慌てて言い直すように続けた。
「あのね、ちゃんと私が選んだんだよ。ただ、職場に雅彦と同じくらいの身長の人がいてね、同僚で沢村（さわむら）って言うんだけど、ちょっとその人にモデルって言うかマネキンになってもらったの。その代わり、私がその彼のお嫁さん用のプレゼントのアドバイスをするって条件で」
早口だった美夏の口調が徐々に申し訳なさそうなものへ変わる。けれど、それはおそら

く雅彦が思っていたような内容が原因でなく、ただ単純に「自分一人でプレゼントを選んだわけでない」という気まずさだろう。
「でもね、実は向こうの方が新婚の幸せ太りで微妙に服のサイズが大きくてさ。それでちょっとだけ不安だったんだけど、でも似合ってて安心したな」
もう雅彦はろくに聞いていなかった。と言うよりも、耳鳴りに似た音ばかりが彼の頭に響いていて、彼女の声はやけに遠かった。
「…あの、ごめんね？」
「いや、大丈夫。そんなの、結局はさ、美夏からのプレゼントに間違いないし」
反射的に返した雅彦の言葉に、美夏は途端に顔を明るくした。そしてそれが余計に彼の心を震わせた。彼は必死に動揺を表に出すまいと努めた。
あってはならないことだった。そんな裏切り行為は決して許されないことだった。だから彼は万に一つの希望を冗談じみた態度に潜ませて聞いてみた。
「でもさ、もしかしてその人と浮気したり、とか」
「するわけないじゃん。って言うか、その人って職場結婚でお嫁さんも私の元同僚なんだけど、すっごい美人なんだよ。まるで女優さんみたいなの」
美夏はあっさりと、あっけらかんと、言った。嘘を吐いている様子はなかった。要するに、彼女は彼を裏切っておらず、そして彼は彼女に裏切られていたのだ。
雅彦の胸の中で天秤がロデオマシンのように暴れた。彼はそんな内心を悟られまいと、いかにも自分からの贈り物を取りに行く風な態度で「ちょっと待ってて」とだけ言い残して寝室へ駆け込んだ。そして不潔な女を払いのけるかのようにコートを勢いよくベッドの上に脱ぎ捨てた。
酷い話だ。極めて酷い話だ。自分は被害者の筈だった。自分こそがそうだった。それなのに、これではまるで雅彦の方が一方的な悪者だ。天秤の受け皿が、地面に埋まるほどに片方へと傾いていた。皿の上には岩のような罪悪感の塊が載っている。
数分後、彼は再びコートを着てリビングへ戻った。手には小箱を握りしめていた。
美夏は一見何も知らない子供のように笑っていた。きっとそれなりに期待しているだろうに、彼女はそれを上手く隠していた。
雅彦は彼女の前まで進み、その場で片膝をつき、顔を伏せたままで小箱の蓋を開けて差し出した。今にも食道を逆流してきそうなご馳走の全てを、あらかじめ用意していた言葉で押さえ込んだ。
「結婚して下さい」
耳鳴りの向こうから息を呑む音が聞こえた。ややあって手が軽くなった。「嬉しい」と、鼻をすする音と彼女の声が同時に生まれた。そこで初めて彼は顔を上げた。
美夏は泣いていた。それでいて笑っていた。そして彼女は彼と目が合った瞬間、思い切り抱きついてきた。彼の鼓膜を言葉にならない彼女の喜びが叩いた。
雅彦はしっかりと彼女を受け止めていた。それと同時に思っていた、やっぱりものは考えようだと。
これほどまでの罪悪感に耐えながらでも失いたくない相手との関係でなければ、むしろ一生を懸けて守っていく価値もない筈だ。だとすれば、きっとこれこそが愛なのだ。
「愛しているよ」

雅彦の言葉に、美夏の泣き声が大きくなる。だからもう一度、彼は前を向いたまま同じ言葉を告げた。

テーブルの上の赤ワインは先ほど席を立った時から少しも減っておらず、きっとこの後で改めて乾杯をすることになるんだろうなと思ったら、それだけが少し憂鬱だった。

〈了〉